

インドの食料需給動向

インドは中国に次ぐ人口大国（10.5億人）であり、今後の世界の食料需給、エネルギー需給を考えるうえでインドの動向は非常に重要である。

インドの食料生産の中心は米、小麦であり、そのほか雑穀や豆類も多く生産している。また、宗教上の理由から肉類の消費量は少ないが、牛乳の生産量も世界最大である。インドはかつては食料の純輸入国であり、1960年代半ばに深刻な食料危機を経験したが、その後、インドは食料増産のため多大の努力を傾注し、高収量品種の導入による「緑の革命」に成功した結果、77年に念願の食料自給を達成した。この間、インドは、食料貿易を国家の管理下に置き外国からの影響を遮断するとともに、食糧公社による穀物買い入れと貧困者への食料配給を行った。

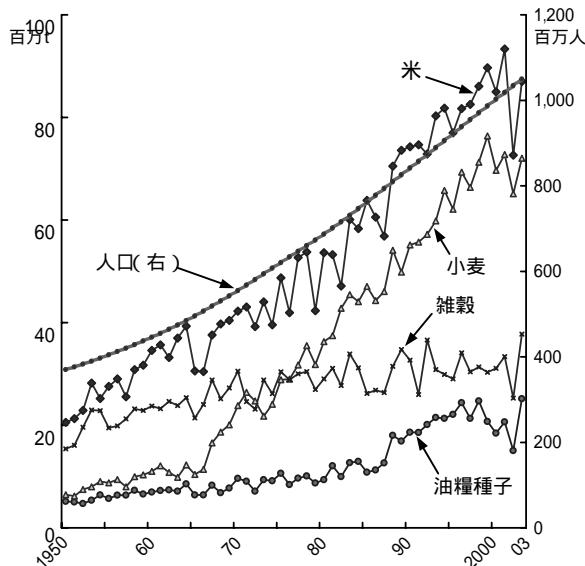
インドは、1991年に、湾岸戦争（90年）とソ連崩壊（91年）の影響を受けて深刻な債務危機に陥り、IMF、世銀の融資を受けて本格的な経済・貿易自由化に転換することになった。農産物貿易においても輸入規制を緩和したが、政府の価格支持もあり穀物生産は順調に伸び、一方で穀物需要が停

滞したため、政府は穀物の過剰在庫を抱えるようになり、95年には米を490万トン輸出し、03年には小麦を402万トン輸出した。

しかし、穀物の過剰在庫は大きな財政負担となっており、また一部の地域で穀物生産に伴う水不足も深刻化し、インド政府は穀物の生産と制度のあり方の再検討を迫られている。一方、貿易自由化の中で、近年、インドは果実、野菜、花、肉類などの農産物輸出を増大させており、インド政府は穀物からこれらの輸出品目に生産を誘導しようとしている。

（清水徹朗）

インドの主要食料生産量



資料：インド農業省「Agricultural Statistics at a Glance」